

「モリソン文庫資料検索」データベースの 構築にあたって

中村 邦子

平成21年4月から23年6月までの間、国立国会図書館の実務研修員として財団法人東洋文庫図書館にお世話になり、洋書の整理を担当させていただきました。この間、東洋文庫の書誌データベース整備計画の一環である「モリソン文庫資料検索」データベースの構築に従事する機会に恵まれた。本稿は、このデータベースを構築するにあたり、どのような作業が行われたかということ、図書館員の立場から記録として残そうというものである。

1. モリソン文庫を概観するために

東洋文庫の礎となったモリソン文庫については、すでに関連研究書及び東洋文庫刊行物の中で幾度となく紹介されているので、改めての説明は不要と思われるが、東洋文庫ホームページに概要が掲載されているので、ホームページの宣伝を兼ねてこれを引用させていただく⁽¹⁾。

「G. E. モリソン氏が北京駐在中およそ20年間に腐心収集したもの。中国を中心としてパンフレット類約7,200種を含む欧文図書24,000冊、地図版画約1,000点、定期刊行物120種余り。特に重要なものとして、マルコ・ポーロ『東方見聞録』の各種刊本54種、中国地方語辞書500冊、日露戦争資料約300冊、各国の中央アジア探検隊の調査報告等が含まれています」。

旧蔵者であるG. E. モリソンについても、同様に以下のように掲載されている⁽²⁾。

「イギリスのジャーナリスト。オーストラリアのヴィクトリア州ジーロン市に生まれる。1895年にロンドン・タイムズ入社、1897年より北京特派員。1911年中華民国総統府顧問。在任中蒐集したモリソン文庫と称される極東関係文献2万4,000冊は1917年、岩崎久彌に譲渡」。

G. E. モリソンは、これらの文献を譲渡するにあたって、公開され、利用に供されること、拡充され、さらに内容が増補されていくことを望んでおり⁽³⁾、東洋文庫は周知のとおり東洋学の専門図書館および研究機関として、現在に至るまで資料の収集を続けている。モリソン文庫として収集された資料は、ひとつの完結したコレクションとなったのではなく、その後続々と収蔵された幾多の資料たちと一体となって、洋書貴重書、洋書、地図版画、定期刊行物など東洋文庫蔵書の各ジャンルを構成してきたのである。

しかし、その後100年近くの歳月を経て、モリソン文庫以後に収集された資料が圧倒的に増え、かつてG. E. モリソンが収集したものがどれであったかを把握することは困難になってきていた。そこで、彼が収集した文献の全体を改めて概観できるよう、今一度モリソン文庫だけを検索できる仕組みを構築することが計画された。さらに一方では、東洋文庫新築にあたり開館するミュージアムにおいて、蔵書の各所に分散していたモリソン文庫資料を集結させ、書架に並べた状態で展示する「モリソン書庫」計画が立てられた。

「モリソン文庫を検索できるデータベースを作る」こと、「そのデータベースにより、蔵書の中からモリソン文庫を抽出し、展示する」ことにより、改めてG. E. モリソンが何を集めてきたのかを概観できるようにすることが、今回の作業の課題であった。

2. 「モリソン文庫資料検索データベース」の概略

幸い、東洋文庫ではすでに和書、洋書、中国書など主要な資料の書誌データベース遡及入力完了しており、基盤となるデータベースはできあがっていた。そこで新たなデータベースを一から構築するのではなく、既存の書誌データに、モリソン文庫であることを示すフラグ（仮に「モリソンフラグ」という）を立て、そのフラグが立っているものだけを対象に検索を行うプログラムを新たに設計することとなった。

そして、ホームページ上に、一般の書誌データ検索とは別に、このような検索を行うリンクを追加し、「モリソン文庫資料検索」⁽⁴⁾専用とした。平成24年1月現在、東洋文庫ホームページによる一般の書誌データ

検索では、洋書（ラテン文字・キリル文字）、和書、中国書、定期刊行物などをそれぞれ別個に検索する必要があるが、「モリソン文庫資料検索」では、資料の種類に拘わらず上述のフラグが立っている書誌データすべてを検索対象としたため、これらを横断的に検索することができるのが大きな特徴である。

また、書誌データに付与されている分類記号を利用して、モリソン文庫を東洋文庫の洋書分類表から検索するプログラムを設計し、ホームページ上に「モリソン文庫資料分類検索」⁽⁵⁾へのリンクも設けることとした。ただしこちらは、東洋文庫では洋書、和書、中国書でそれぞれ分類体系が異なっているため、横断検索は断念することとし、検索対象をモリソン文庫の大多数を占める洋書（貴重書、パンフレットを含む）のみとした。定期刊行物には図書の分類記号が付与されていないため、これも対象外となった。

データベースの概略がこのようなものとなったので、プログラムの設計は東洋文庫のサーバー室にお願いし、その構築のための筆者の主な作業は「東洋文庫の蔵書の中からモリソン文庫を探し出し、フラグを立てること」に絞られることとなった。

3. 「モリソン文庫」の検索

東洋文庫設立時のモリソン文庫の内容を知る手がかりとして、*Catalogue of the Asiatic Library of Dr. G. E. Morrison, now a part of the Oriental Library, Tokyo, Japan.* -- Tokyo : The Oriental Library, 1924（以下、『モリソン文庫目録』）という目録が残されている。これはモリソン文庫の譲渡の際、モリソンの作った目録をそのまま印刷したもの⁽⁶⁾で、その経緯からもわかるように、東洋文庫の蔵書としての請求番号はまだ記載されていない。そこで、まずここに収録されている文献をすべて書誌データベースで検索し、東洋文庫での所蔵を確認することとなった。

この、書誌データベース全件検索作業は外部委託により平成21年度中に完了したが、その際、データベース上で同定できたものはおよそ全体（24,000件）の八割程度であった。残りの一割はそれらしき検索結果が得られたものの、何らかの理由により同定に至らなかったものであり、

最後の割は検索しても該当資料が見つからなかったものであった。全体の約八割の同定された書誌データには、この時点ですべて、ひとまず「モリソン」のフラグが立てられた。

残りのうち一割、「同定に至らなかったもの」については一点一点、資料現物を確認し、モリソン文庫の特徴であるG. E. モリソンの蔵書票の有無の確認を行った。この作業が主に筆者の担当するところとなった。

現物を確認したところ、上述の『モリソン文庫目録』の記述方法と、東洋文庫の目録の記述方法に相違があったため、慎重に判断され同定できなかったものがほとんどだったが、全く同じ書誌データが複数あり判別ができないもの、『モリソン文庫目録』に多巻ものの一部が収録されており、東洋文庫ではそれ以外の巻もあわせて所蔵しているため、書誌データを見ただけでは判断ができなかったものも少なくなかった。

前者については、書誌データと資料の対応関係を実際に確認し、該当するものにモリソンフラグを立てるだけでなく、他の書誌データについて「他にモリソン本あり」などのメモを残した。後者については、原則として多巻もの場合、一つの書誌データに各巻の情報を記述するのであるが、一部の巻号のみがモリソン文庫であった場合に限り、将来モリソン文庫だけを別に配架することを考慮し、モリソン文庫とそうでないものとを、それぞれ別の書誌データに分割したうえでフラグを立てることとした。

これらの作業は平成22年度の第1四半期までにおおむね終了し、「モリソン文庫資料検索データベース」は、ひとまずこの時点で公開とした⁽⁷⁾。

最後の割は「該当資料が見つからなかったもの」である。「モリソン文庫資料検索データベース」を謳う以上は、これらにはできる限り解決してデータベースを正確なものとしたい。そのためには職員が再度、発想を変えて検索しなおし、確認するしか方法がなく、平成22年度の第2・第3四半期をほぼ費やしての作業となった。次項では、その作業の実際や、記憶に残る資料群について記したい。

4. 検索できない資料の探索

(1) 『モリソン文庫目録』の特徴

平成22年の6月末から12月中いっぱいまで、先に述べた書誌データベース検索作業で該当資料が見つからなかったものについて、再度『モリソン文庫目録』を手がかりに検索と現物確認を繰り返していくこととなった。

ここで『モリソン文庫目録』について、筆者が理解した範囲で特徴を記してみたい。

この目録は Part 1, 2 の2巻からなり、Part 1 に G. E. モリソン自身による前書き、目録出版時に記されたモリソンの伝記および英語の文献目録を収録している。Part 2 に仏語、独語、オランダ語、ロシア語などを含む十数か国語の文献目録と、年代順のマンデヴィル (Sir John Mandeville) とマルコ・ポーロコレクションの目録、図版類の目録を収録している。文献目録は単行書、多巻もの、小冊子、抜刷り・ビラの類、雑誌記事・論文などが区別なく一緒に掲載されている。

Part 1, 2 ともにそれぞれの言語別の目録は、それぞれの文献に付された、いわゆる「キーワード」のアルファベット順に配列されている。このキーワードは多くの場合人名(著者、伝記の被伝者など)、団体名であり、そうでない場合は書名のことが多かったが、地名、事件名なども見受けられた。このほか Part 1 では Blue books, Consular reports, Customs, Imperial Maritime, Mission reports, Opium, Treaties などの特定のテーマのキーワードがあり、その下に多くの文献が集められ、著者や書名のアルファベット順に配列されていた。これらの部分には特別に見出しが付けられ、特徴ある資料群を形作っていて、モリソンがとりわけ留意して収集したものであろうということがうかがわれた。

Part 2 でもっとも特徴的であったのはロシア語部分で、タイトルが英語に翻訳され、英語のキーワード(書名や著者名も英訳または翻字されていた)が付与されたうえで、そのアルファベット順に配列されていた。このため、これらを東洋文庫の洋書の書誌データベースで検索するためには、著者名を再度キリルに戻さなければならず、英訳されてしまった書名やキーワードはロシア語に直す必要があった。また、ここでひとま

ずロシア語に直したタイトルが、元来のタイトルと同じであるとは限らないため、その中のいくつかの単語や著者名を検索してあたりをつけ、出版社や出版年、ページ数などを書誌データと目録とを見比べ、最後に書庫で現物を確認する、というような作業が発生した。(これらに関しては早稲田大学の青木雅浩氏が非常勤として来庫され、400件にのぼるデータベース検索から資料現物の確認、書誌データの修正にいたるまで、すべての作業を一貫してお手伝い下さった。この場を借りて感謝申し上げます。)

そのほか、多言語で書かれている文献は英語文献として掲載されているものと、英語以外の文献として掲載されているものがあったが、特に中国語や日本語の場合、英語タイトルを持っているものは本文の言語に関係なく英語文献として掲載されている場合が多く、検索作業をさらに複雑なものにしていた。

定期刊行物はモリソンによる前書きにタイトルが列挙されていたが、それぞれ、文献目録中にも掲載されていた。タイトルや出版者をキーワードとして、タイトル単位でまとまって載っているものと、収録論文一件一件がタイトル、著者名などをキーワードとして個別に載っているものがあった。

一般的にキーワードはあまり統制されてはならず、特に著者名の表記などにはばらつきがみられたので、フルネームとイニシャル、セカンドネームの有無など人名の検索には注意が必要だった。しかし複数著者のある文献など、いくつかのキーワードが考えられるものには、参照がつけられているものも多く、検索の便もかなり図られていた。また、詳細な注記を付したものも相当に見受けられた。内容の説明などだけでなく、その性質や収集来歴や装丁などの特徴、添付物や書込みなど、その文献に固有の情報もしばしば掲載されており、非常に興味深いものがあった。

以上のような特徴をみたくえて、この目録の情報を手がかりに、先の書誌データベース検索作業で見つからなかったものを再度探していった。多くは、図書や雑誌に含まれている個々の著作が個別に『モリソン文庫目録』に掲載されており、それらのタイトルが書誌データに入力されて

いないために検索できなかったケースだった。これらについては、『モリソン文庫目録』に注記されていた収録書・雑誌名及び号数、年月次などから現物資料の所在を確認し、その著作が載っていること、「モリソン蔵書票」があることも確認した上で、当該書誌データにモリソンフラグを立て、さらに収録されている各著作について、所蔵注記や内容注記に追記していった。

しかしどうにも見つからず悩まされたものもあり、またそれらを探索する過程で思いかけずデータベースに入力されていなかった資料群を見つけることができた。以下(2)から(5)までに記憶に残る例を挙げておく。

(2) 海関資料

『モリソン文庫目録』で Customs, Imperial Maritime の見出しの下に集まっているもの、例えば *China. Inspectorate general of customs. Statistical department. I. Statistical series. no.3. Returns of trade at the treaty ports. (Shanghai : printed at the Customs Press)* などは、ほぼすべてが検索できなかったものとして残されていた。再三試みてみたものの、確かに洋書のデータベース、中国書のデータベースいずれからも見つけることができなかった。苦心していたところ、東洋文庫図書部（以下、「図書部」）の職員の方々から、清末の海関報告書の類が雑誌の書庫に多数あることをご教示いただいた。さらにこれらは、洋雑誌（年鑑類）として整理されており、種々の事情により書誌データの遡及入力が完了していないものが少なからずあるとのことであった。

早速定期刊行物の書誌データベースを検索したところ、2件の該当する検索結果が得られた。さらに書庫で確認したところ、年次にいくらかの欠けはあるものの、『モリソン文庫目録』に掲載されている文献名をほぼすべて確認することができた。しかし大半の資料が改装されており、元の装丁が残っているもの、「モリソン蔵書票」が貼付されているものはごく少数であったため、しばらくの間モリソン文庫と同定することを慎重に考えていた。

そこへ平成23年1月の新館への移転作業の際、書庫内で発見された段

ボール箱からこれらの資料のオリジナルの「表紙だけ」が見つかり、そこには「モリソン蔵書票」が貼付されていた。これにより、これらの資料をモリソン文庫と同定することができた。また、未入力であった書誌データの遡及入力も行った。

以後、洋書として検索できないものは定期刊行物のデータベースで検索してみることに、未入力資料である可能性も視野に入れ、特に年鑑類と思われるものは書庫で直接探してみることにした。その結果、検索できず残されていた資料の多くを定期刊行物の中から見つけることができ、約240件の書誌データを新たに追加することもできた。

(3) 英国外交資料

次に見つけるのが困難だったのは『モリソン文庫目録』で *Consular reports, Treaties* などという見出しの下に集められている文献であった。これらの大半は、前述の海関資料探索が一段落した後、その経験をもとに洋雑誌（年鑑類）の書架を直接探しているうち、ひとまとまりに配架されているのを見つけることができた。一部を除き、書誌データベースに未入力であったため、この機会に160件ほどの入力作業をあわせて行った。

主なもののひとつは *Great Britain. Commercial reports from Her Majesty's consuls in China* - London : printed for H.M.S.O. (1862/64 (1865) ~ 1885 : pt. 1-2を所蔵、欠あり) や *Great Britain. Foreign Office. Diplomatic and consular reports. China. Report on the trade of Amoy.* - London : printed for H.M.S.O. (1897 (1898) -1904 (1905), 1906 (1907) -1914 (1915) を所蔵) など報告書類で、中国各地、マカオ、台湾、日本、朝鮮半島、タイ、ベトナム、フランス植民地のものが確認できた。このほか個別のテーマに関する *Reports on subjects of general and commercial interest* といった報告書もあり、それ以外にも、例えば日本に関するものには *Report on tea culture in Japan* (1905), *Report on the raw silk industry of Japan and on Habutae* (1909), *Report on the coal mining industry in the Hokkaido* (1912) などといったものがあった。

いまひとつは条約などに関するもので、例えば、モリソンと深い関わり

りのある日英同盟に関するもの *Agreement between the United Kingdom and Japan, relative to China and Corea, signed at London, January 30, 1902*. London : Printed for H.M.S.O. [1902] (Treaty series ; no. 3 (1902)) などがあるほか、イギリスがアジアの各国と、あるいはアジアの各国・各地域をめぐって結んだものに関する資料が見受けられた。

これらの資料は、おそらく東洋文庫以外でも閲覧することは可能だろう。しかし、モリソンがこれらを集めていたということに意味があると思われる。実際、これらの中にはモリソンのサイン⁽⁸⁾が書き込まれているものだけでなく、サインと同じ筆跡で書き込み⁽⁹⁾がされているものがいくつか確認された。

(4) 米国外交資料

上記(2)・(3)の資料を探している間に、その近辺の書架から「未整理」と書かれた紙束がいくつも見つかった。それぞれ白い封筒(内容物の大きさに合わせて作られたと思われる)に入れられていて、その上に国名と西暦年が青鉛筆で大きく書かれていた。青鉛筆はモリソン文庫の資料の書き込みに多用されているものと同じものであった。

埃で相当に汚れていたため、ドライクリーニング後、インターネットで見出しや本文に含まれている単語を検索することにより、何の一部であるかを探してみることにした。GOOGLE BOOK の画像情報なども参照することにより、これらの紙片は *Papers relating to the foreign relations of the United States, with the annual message of the President* の中国、日本、朝鮮半島、タイ、ロシアに関する部分を切りとったものであろうと推測された。中国と日本は1863年から1906年、朝鮮半島は1883年から1905年、対は1893年から1897年、ロシアは1903年から1905年のもの、及び *Open-Door 1905* そして、*Extracted from : Appendix to Diplomatic correspondence of 1865 : the assassination of Abraham Lincoln, late President of the United States of America, and the attempted assassination of William H. Seward, Secretary of State, and Frederick W. Seward, Assistant Secretary, on the evening of the 14th of April, 1865* の中国と日本の部分が確認された。また、『モリソン文庫目録』の掲載文献のうち、書誌データベース検索で

見つけることができず最後まで残されていたものに、これらに該当するものが含まれていた。

これらには「モリソン蔵書票」は貼付されていなかったが、『モリソン文庫目録』に所蔵期間や「封筒に収納されている」ことも含め、あてはまる記述⁽¹⁰⁾があること、収納されていた封筒に書かれていた数字がモリソン文庫の資料のいくつかにみられる書き込みと共通する字体であることから、モリソン文庫のものとした。特に日露戦争にかかわる国と地域のものを集めているなど、これらはモリソンがどの年代のどの地域に特に関心を持っていたか、を表す貴重な資料であろう。

いわゆる「図書館の目録」を作成するにはあまりに推定に頼る部分が多かったのだが、まずは書誌データを作成・公開し検索の便を図ることが第一と考え、原則として封筒1つを1件とし、洋書として整理し105件の書誌データを作成、入力した。

(5) パンフレット

今回の作業と同時期に、モリソンパンフレット（モリソン文庫のうち、抜き刷り、小冊子類を整理、製本し、一般の洋書とは別の請求番号を付与したもの）のデジタル画像撮影が行われており、そのための現物と書誌データの照合作業が行われていた。折よく、この作業の担当者と連携し、資料はあるが該当する書誌データが見つからないものや、書誌データに誤りがあるものについて連絡していただき、それらの新規作成や訂正をすると同時に『モリソン文庫目録』との照合も行うことができた。ここでは、一つの抜き刷りや冊子に複数の文献や記事が収録されており、その一部について書誌データが作成されていない、といったものがいくつか見受けられた。

この結果、当初検索できなかった『モリソン文庫目録』掲載文献78件の所在を確認し、新たな書誌データを作成することができた。（モリソンパンフレットはすでに請求記号順に製本されていて、新たな請求記号の採番は管理上難しかったため、新たに作成した書誌データには、やむをえずその直前または直後に綴じられている資料のうち、関連性が高いほうの請求番号と同じものを付与した。）

5. 資料現物との照合

平成23年1月に新館への移転が始まり、その完了後の平成24年度に入って、今までの一連の作業でモリソン本と同定したものの現物確認及び抽出、ミュージアムでの展示準備を開始した。ミュージアムの内装完成までにはまだ時間があったため、この時点での作業では、新館貴重書庫内に展示準備用の書架を確保し、確認後の資料を一般の洋書の書架から抜き出して配架することとした。

まず、今までにモリソン文庫と同定したものの、すなわち書誌データベースに「モリソン」のフラグを立てたものだけをデータベース上で抽出し、請求記号順にソートして書誌情報をラベルに出力、そのラベルを別途用意した中性紙のボール紙に貼付して請求記号順に並んだ代本板を作った。次にこれを、臨時職員の方々の力もお借りして書庫内で一件ずつ現物と照合し、「モリソン蔵書票」が貼付してあるかどうかを確認した。確認できたものは代本板と引き換えに、資料を展示準備用書架に請求記号順に移動、配架し、確認できないものは代本板の余白に状況を記録の上持ち帰り、翌日以降確認作業を行うこととした。(展示準備用書架内には、これらの資料を調査後に繰り込めるよう、調整用の段を確保しておいた。)

確認できなかったものを、改めて『モリソン文庫目録』の記載とつき合わせ、図書部の職員の方々と相談しながら「モリソン文庫なのかどうか」を総合的に判断する、というのが筆者の次の作業となり、東洋文庫での実務研修期間が終了する平成23年6月までをこれに費やすこととなった。以下に記すのは、これらの判断の際に経験した、モリソン文庫の歴史を物語ると思われる事柄である。

(1) 水害被害

モリソン文庫は日本に到着し深川の倉庫に一旦納められた後に、暴風雨に逢って倉庫が浸水、多くの資料が被害にあった、とモリソン文庫の日本移送に関わった石田幹之助⁽¹¹⁾が回想している。「(1) 無傷のものは取りあへず別に置いて外のものとは交らぬようにすること (2) 水を吸ったもので表紙もプカプカになりかかり、膠も変調を呈してゐるやうなものは表紙を廃棄して新に製本しなほすこと (3) アート・ペーパーを使

つた本で水のために紙が粘着してしまつて開けなくなつたものは思ひきつて廃棄処分に附し、幸ひそれらは新刊の書が多いので新に買いなほすこと」という方針が立てられ⁽¹²⁾、当時の知識を結集して紙を乾かしたり、湿気を含んだりカビが発生した革表紙を取り去り製本しなおす、などの作業が行われた、といった記述が残っている。

実際に図書を一点ずつ確認している間に、あきらかに水にぬれて乾いた形跡のあるものが相当量発見された。これらは形がゆがんだり、一部のページがくっついて取れなかったり、無理にページをはがしたために、文字が薄くなったりめくれて読めなくなったりしていた。また多くに、ピンク色の広範囲にわたる染みが見受けられた。

記憶に残る例として、*Ancient Khotan : detailed report of archaeological explorations in Chinese Turkestan / carried out and described under the orders of H.M. Indian government by M. Aurel Stein. (2 v.) -- Oxford : Oxford University, 1907.* がある。書庫の所定の位置には全く同じものが2セットあり、ひとつは著しい水濡れの痕跡があり、もうひとつは状態のよいものだった。水濡れしたものは近年の改装がなされており「モリソン蔵書票」がなく、状態の良いほうには、「モリソン蔵書票」と一緒に「丸善」と印刷されたシールが貼付されていた。

筆者はこれらについて、「水濡れの被害が著しいため丸善で同じものを購入し、「モリソン蔵書票」を貼付して代用とした。しかし、水濡れした本来のモリソン文庫本も捨てるにしのびず、結局一緒に並べて置かれた。さらに傷みがひどいため後に改装され、その際にモリソン蔵書票が失われた」のではないかと推察し、水濡れしたセットのほうをモリソン文庫とした。

日本で「モリソン蔵書票」を貼付したこともある、ということは、東洋文庫の職員の方からもそれらしい話を伺った。もし過去に東洋文庫でモリソン文庫に関わった方がおられれば、このあたりのことはきっと詳しくご存知なのではないかと思う。実際、状態の良い装丁の図書の中には、「モリソン蔵書票」の上に日本の雑誌の広告や新聞紙の切れ端を当てた状態で見つかったものが相当あり、装丁しなおしたものに蔵書票を貼っていたと推測される。

また、図書部事務室で使われている『モリソン文庫目録』の、*London Missionary Society North China. Synopsis of reports of the work for the year ending Dec. 31, 1909. pp.42, with tinted illus.* の項には、「水害廃棄」とメモがあり、実際に最後まで所在が確認できなかった。このようにして失われたものもいくつかあったのであろう。いずれにしても、これら水害に遭った資料たちは、モリソン文庫の歴史を生々しく語っている。

(2) 国内購入に関する疑問

さきに、「モリソン蔵書票と丸善のシールが貼付されている」ということを書いたが、前出のような事情が推測できるもの以外にも、国内の書店と「モリソン蔵書票」が一緒に貼られているものがあり、手元で控えていたものだけでも、26件ほど見受けられた。

そして、そのなかにも、「モリソン文庫蔵書票のみ貼付されたもの」「モリソン蔵書票と国内書店のシールがあるもの」の2冊が所蔵されているケースと、「モリソン蔵書票と国内書店のシールがあるもの」しか所蔵していないケースがあった。国内書店のシールには、丸善、紀伊国屋、十字屋、教文館、Kelly & Walsh Yokohama、などがあった。

とりあえず、前者の場合は「モリソン蔵書票」だけがあるものをモリソン文庫とした。後者の場合はモリソンが日本で、もしくは日本の書店から購入した可能性も否定できず、また前述の水害など何らかの理由で、日本への移送後に入手されたとも考えられる。書店のシールを手がかりに、そのシールが使われた時期を調査することができれば、購入した時期を推測することが可能であろうが、残念ながら、今回はそのような調査を行うには至らなかった。

結局図書部の職員の方々と相談した結果、「モリソン」ではなく「保留」というフラグを立てることとし「モリソン蔵書票と書店のシールが貼付されていること」「『モリソン文庫目録』の記載箇所」を書誌データの事務用メモに記録した上で、今後の調査を待つこととした。

(3) 多巻もの

現物確認作業を進めるうちに、多巻もので書誌データ上検索時にはモ

リソン文庫と同定できたものの、現物をみると一部の巻しか「モリソン蔵書票」が貼付されていなかったり、国内の書店のシールが見つかったり、さらにその両方が貼付されていたり、というような今までにみたケースの複合例が出てきて頭を抱えてしまうことがあった。さらに一部の巻だけに水濡れ被害の痕があるがモリソン蔵書票はない…となると事態はさらに複雑になった。

これらについては「モリソン蔵書票だけがある巻」とそれ以外で書誌データを分割し、個別の状況を考えながらも原則としては「モリソン蔵書票がある巻」の書誌データだけにモリソンフラグを立てた。それぞれの書誌データの事務用メモに「○巻はモリソン本のため別書誌」「○巻にはモリソン蔵書票がないため別書誌」などのメモを残した。

(4) 最後の判断

最後に「東洋文庫に1冊しかなく、書誌データ上ではモリソン本と同定できるのに、実際の資料にはモリソン蔵書票がない」というものが残った。蔵書票が確認できなくても、モリソンのサインがあったり、サインと特徴が共通している筆跡でなんらかの書き込みがみられるもの、モリソンへのメッセージが書き残されているもの、『モリソン文庫目録』に、そのものに固有の特徴が記されているもの（たとえば書き込みがあるなど）はどうか同定することができたが、そのほかは判断の決め手に乏しかった。

ここでも苦慮の末、国内の旧蔵者、書店などの来歴が確認されず⁽¹³⁾、東洋文庫に1冊のみ所蔵されている場合は、個々の状況にもよるが原則として「モリソン蔵書票は貼付されていない」「他に所蔵なし」「『モリソン文庫目録』の記載箇所」を記録した上で「モリソン文庫」とした。これらについては、今後の調査によって真相が明らかにされることを期待したい。

また、現物を確認して初めて別の寄贈者から受け取ったものとわかったものもあった。この場合はいったん立てたモリソン文庫フラグを削除し、モリソン文庫としての所在は不明、と結論することとなった。

定期刊行物は改装することにより、元の表紙とともに「モリソン蔵書

票」を失ったと思われるものが多いため、原則として『モリソン文庫目録』の記載と所蔵巻号が一致するものは「モリソン文庫」としたが、所蔵巻号に異同があるものは判断の決め手に欠け、「保留」とせざるを得なかった。

このような作業の結果、『モリソン文庫目録』収録文献約24,000件の中で、最終的に判断がつかず「保留」としたものが約180件、該当資料を検索できなかったものが約700件残った。

6. 作業を終えて

平成23年6月末の作業終了時点で、書誌データベースには17,455件のモリソンフラグが立てられた。『モリソン文庫目録』収録文献の数からみると、約24,000件のうち保留したもの、検索できなかったものを除き、およそ23,120件、96パーセントをカバーするデータベースを構築できたことになる。

聞くところによれば、モリソン文庫譲渡時から現在まで、その所蔵を一度に1件ずつ全て確認したことは今までになかったらしい。もしそれが真実であれば、およそ百年の時間を経て『モリソン文庫目録』の全部の記載に目を通し、わかる限りのすべての資料を一目は見ることでできたことになるわけで、筆者にはこの上ない幸運だったと思う。

もちろん、『モリソン文庫目録』と東洋文庫の蔵書との照合は今までも少しずつ行われており、事務用に使われている『モリソン文庫目録』に、いくらかの請求番号が書き残されていて、今回の作業では大いに助けになった。長い時間にわたり地道に記録を残してくださった先輩たちによる財産があつての、このたびの作業であった。心から感謝したい。また、「モリソン蔵書票」の確認と資料の抜き出し、配架作業を地道に繰り返してくださった図書部の臨時職員の皆様にもお礼申し上げる。

今後、このようなことができればということ率直にいくつか記して結びとしたい。

一つは、モリソン文庫のそれぞれの書誌データに、「アーカイブ資料としての」「その一点」に関する詳細な記録を加えられたらよい、ということである。書き込みや添付物の有無、貼付物の有無などの記録は、

図書館における一般的な書誌作成の規則では必須ではないが、研究の対象としてモリソン文庫を見たときこれらの情報は重要であろう。今回のデータベース作成のための調査で発見されたものには、事務用メモを残す欄にそのような情報を可能な限り入力したが、それらの情報を公開のデータベースのなかに残すことができれば研究に有用ではないかと思う。

もうひとつは、先に述べた「モリソン文庫資料分類検索」に定期刊行物、和書、中国書など現在検索対象外のものにも何らかの形で洋書と同じ分類記号を付加し、分類検索が可能になればよいということである。

分類検索は、居ながらにして分野ごとにG. E. モリソンが集めたものを一覽し、その世界を垣間見ることができる興味深い手段である。しかし、今回触れた海関資料、英国外交資料などは定期刊行物として整理されているため、現状では分類検索ができない。今後、データが網羅的に検索できるようになることを期待したい。

最後に、今回の作業で少々関わることができたモリソンパンフレットについてである。パンフレットは製本の上保存されており、そのおかげで今まで散逸することなく保存されてきたのは間違いのない。しかし、残念なことに紙の劣化が著しくなっており、製本の綴じ糸が紙を傷めているものも多く、綴じ部分が破れて製本から外れてしまったものも見受けられた。今回目にしたのものには補修を行ったり、中性紙封筒におさめて挟み込むなどの応急措置をとってみたが、できることには限りがあった。たとえば製本による保存から保存容器による保存に替えていく、その過程で完全に開いた状態のデジタル撮影を行って画像を利用に供するようになるなど、今までと違う方法での保存・利用も考慮に入れ、今後の調査研究の発展とあわせて、資料をより永く残せるような方策がとられれば良いと考えている。

そして今後調査研究が進み、今回の調査でわからなかった残りの資料の状況が明らかになったり、構築したデータベースがより正確なものに修正されていくことがあればとても有難い。

モリソン文庫はその後東洋文庫ミュージアム内の「モリソン書庫」に無事移転し、平成23年10月のグランドオープンにより公開展示された。

今回構築されたデータベースと、その活用の成果ともいえる「モリソン書庫」が、モリソン文庫の知名度を上げ、より多くの方に関心を持っていただき、さらに今後の研究を発展させるための基礎となれば幸いである。

また在任中の短い期間に、東洋文庫の設立に深くかかわるコレクションに関わり、その歴史を直接体験することができたことに深く感謝している。財団法人東洋文庫の皆様に変更して御礼申し上げたい。

注

- (1) <http://www.toyo-bunko.or.jp/library3/shozou/> (2012年1月10日現在)
- (2) <http://www.toyo-bunko.or.jp/library3/shozou/morison.html> (2012年1月10日現在)
- (3) 『東洋文庫八十年史. I (沿革と名品)』東洋文庫、2007.3. p.11
- (4) <http://61.197.194.13/open/MorisonQueryInput.html> (2010/7/2 公開)
- (5) <http://61.197.194.13/morisoncategory/index.html> (2010/11/8 公開)
- (6) 「東洋文庫の六十年」榎一雄著、東洋文庫刊 1977 p.26
- (7) 書誌データベース検索で同定できたものの現物蔵書票確認が残っていたが、これは、新館移転作業を間近に控えていたことから、後述のモリソン文庫抽出作業時に行った。
- (8) たとえば *Agreement between the United Kingdom and Siam, relative to taxation on land held or owned by British subjects in Siam, September 20, 1900.* (Treaty series; no. 21 (1900)) にはモリソンのサインがあった。
- (9) たとえば、*Agreement between the United Kingdom and Japan, signed at London, August 12, 1905* : Printed for H.M.S.O. [1905] (Treaty series; no. 25 (1905)) には、このような書き込みがあった。
- (10) 『モリソン文庫目録』では、Part 1 p. 745に [United States. Foreign Relations.] をキーワード見出しとして、“Corea 1883-1888 inclusive…”と国名と所蔵期間をあげたあと、The numbers on the envelopes refer to the volumes from which papers are taken. The extracts complete and comprised every papers published by The United States in the

Foreign Relations regarding China, Siam and where interests are more also of China-Japan and Russia…のように記載されていた。

- (11) 『石田幹之助著作集 4 東洋文庫の生まれるまで』六興出版 1986 p. 51-58に詳しい。
- (12) 同上 p. 54から引用
- (13) 逆に海外の旧蔵者の蔵書票とモリソンの蔵書票が一緒に貼付されているものは、モリソンの入手歴を語るものと想像され興味をかきたてられた(たとえばアーネスト・サトウとモリソンの蔵書票が貼られている例があった)。
- (14) 『モリソン文庫目録』では雑誌掲載論文なども1件に数えている場合があるため、東洋文庫の規則にしたがって作成した書誌データの数とは違った数値となる。

(国立国会図書館司書)